くま経プレス

経済

大交流時代で都市の魅力アップへ

変貌遂げる広域交流時代の新玄関

「新合同庁舎B棟」建設も前進、駅周辺活性化の核施設へ

九州新幹線全線開業に合わせた関連整備事業で大きく姿を変えつつある熊本駅周辺。写真左が新幹線熊本駅舎。中央の在来線駅舎は平成28年度完成予定の連続立体交差（鉄道高架化）事業に合わせ整備される。右端は県内最高層（35階建て地上123m）となる駅東A地区の再開発ビル

▲熊本駅南側に完成した熊本地方合同庁舎A棟。A棟南側（写真奥）にB棟が完成すれば、九州財務局や九州農政局など14官署、約1800人が勤務することになり熊本駅周辺の活性化が期待される

熊本 KUMAMOTO

念願の九州新幹線全線開業に加え、来年4月に予定される政令市移行を都市圏の活性化につなげたい熊本市。熊本城を筆頭に恵まれた歴史文化遺産に磨きをかけ、人口減少時代に国内外からの誘客強化で立ち向かう。

1973（昭和48）年の整備計画決定から38年。待望の九州新幹線が3月12日に全線開業し、熊本も本格的な広域交流時代を迎えた。

熊本駅周辺では鉄路の新玄関口の整備が急ピッチで進んでいる。駅前（駅東A地区）では在来線熊本駅前とペデストリアンデッキでつながり、「熊本市図書・情報センター」（仮称）や商業施設が入る再開発ビル「くまもと森都心」が背丈を伸ばしている。完成すればマンション棟は35階建て、地上123mで県内最高層となる。

駅南側には熊本地方合同庁舎A棟（地上12階、地下1階）が昨年11月に完成。国の出先再編で凍結されていたB棟建設も、熊本側の粘り強い働きかけで動き始めた。

九州新幹線の運行を保守整備面で支えるのが約20haの広大な敷地を持つ熊本市富合町の「熊本総合車両所」。県や熊本市では見学者への施設開放をJR九州に要望。JR九州も積極的に受け入れる考えで、熊本市の新しい産業観光の拠点として期待される。

▲熊本市富合町のJR九州熊本総合車両所に駐機する新幹線車両。同車両所は敷地面積が約20haでJR西日本の博多総合車両所、JR東日本の仙台総合車両センターに次ぐ全国3番目の規模。熊本市の“産業観光”の拠点としても期待されている

変わる県都、新幹線効果最大化へ

集積増す鹿児島中央駅一帯〝2度目〟の開業へ

▲東千石町の電車通り沿いで工事が進む大阪市の㈱阪急阪神ホテルズの13階建て「レム鹿児島（仮）」（251室）。11年10月のオープン予定。商工会議所ビル「アイム」を挟み先発組の「東横イン」がある

12年3月完成に向け鹿児島中央駅正面で建設が進む南国殖産の14階建て複合オフィスビル（延べ床面積約2万6千㎡）。上層階からは桜島が一望できるという

鹿児島 KAGOSHIMA

04年3月の九州新幹線部分開業から7年。鹿児島市の鹿児島中央駅一帯は県都の玄関口としての様相を刻々と変えつつある。駅正面には南国殖産㈱の14階建再開発ビルが建設中で今後さらなる集積を誘発しそうだ。

04年3月の九州新幹線鹿児島ルート「新八代」―「鹿児島中央」間の部分開業から7年。今回〝2度目〟の開業を迎えた鹿児島市では新幹線効果を最大限取り込もうと各所で受け入れ準備が進んでいる。鹿児島中央駅一帯では部分開業以降、ビジネスホテルやマンションの建設が相次ぎ、現在駅正面では地場総合商社の南国殖産㈱が、「ソラリア西鉄ホテル」が入居する14階建て複合オフィスビルを建設しており完成すれば県都の玄関として一帯の様相はさらに変わりそうだ。

同駅から歩いて数分の甲突川河畔は同市が輩出した幕末から明治維新にかけての偉人の歴史をたどる観光スポットとして維新ふるさと館を核に武家屋敷やボードウォーク、観光交流センターなどが整備され、夜間のライトアップの準備も進む。

部分開業前後にビジネスホテルの出店ラッシュが続いた市中心部の天文館地区。全線開業を機に新たな県外資本の新規出店工事の槌音が響く。その天文館から離島航路の起点となる鹿児島港本港区は徒歩圏内。市も3月から市営桜島フェリーで定期観光クルーズの運行を開始するなど鹿児島ならではの資源を生かした観光戦略に注目が集まりそうだ。

◀種子島・屋久島を結ぶ高速船「トッピー」。いわさきグループの鹿児島商船㈱が運航する。同航路は年間42万2千人（09年、降客数）が利用する